

## (8) 川内原発の地元から

鹿児島県一般男性

鹿児島県の川内原発は、現在稼働している国内で唯一の原子力発電所です。原発は要らないと思う人にとっては目の敵・目の上のタンコブであり、原子力が必要と考える人にとっては「頼みの綱」になっていると思います。我々地元の人間のほとんどは（当然ながら原子力発電所を動かしている九電職員、所員も）、黙って静かに電気を作り続ける「我らが原子力発電所」を信頼し、安全性について全く疑問を持っていません。しかし、全国紙は言うまでも無く鹿児島市内に本社を置く地元紙も、ことあるたびに「地元の不安」を大きな活字で書きたてます。

少なからぬ地元の人間が過去に報道機関の取材やインタビューを受けた経験がありますが、出来上がった紙面やテレビ画面では、「地元ではこれほどまでに不安が広がっている」と言う方向の編集しか行われず、自分はそんなつもりは全くなかったのに、自分の言ったことの言葉尻が、そのための材料に巧妙に使われます。さらに、それを見た知人友人から、

「お前、あげなことを言うたのか」

となじられて、人間関係がぎくしゃくすることさえあります。

それやこれやで、地元の人間はこのような反原発報道（騒動）にある意味で慣れているだけでなく、報道関係者の前では一切口を開かないことが習い性になってしまっています。実際、発電所の入り口でシュプレヒコールを上げている人たちの中に「地のもん」はほとんどいません。先日の参議院議員選挙と同じ日に行われた鹿児島県知事選挙では、反原発を標榜するジャーナリスト出身者が当選しましたが、新しい知事は、おおむね「川内市以外の鹿児島県民の」得票で当選したはずで

去年8月の再稼働の日は、全国から大勢の人が押し寄せ、管直人と福島瑞穂が発電所前で派手にアジ演説を行ってその様子を目いっぱいテレビに撮らせて、そのあと潮が引くように帰ってゆきました。いつか読んだ保守系紙に、沖縄県の辺野古で大きな声を挙げているのは殆ど県外人だ、とありましたが、原発の地元でも全く同じ構造です。

むしろ、私たちが不満に思うのは次の点です。

政府が、「原子力は重要なベースロード電源」と表明したのは、もう何年前のことになりましたか。そのとき、私たちは「そうだ、そうだ」と頷いたものですが、それにしてもその後、政府関係者が自信を持ってそのことをフォローする言葉を耳にしたことがほとんどありません。

一方で、原子力に批判的な自治体首長の発言は、その後枚挙にいとまがありません。先日も、玄海原子力発電所のある佐賀県玄海町の隣の伊万里市長が、

「玄海原発の再稼働を認めない」

と発言しましたし、当選した新鹿児島県知事は、早速「川内原発の運転停止を申し入れる」と発言しました。自治体の首長に法律上どこまでの権限があるのか、私たち素人にはわかりませんが、いずれにせよ、政府が「原子力は重要なベースロード電源」との立場を採っているのなら、なぜ間髪入れず反論しないのでしょうか。現状は言われっぱなし、やられっぱなしです。こんなことが際限なく続けば、あのとき「そうだ、そうだ」と頷いた人々の間にもじわじわと不安が広がることは間違いありません。

安倍政権が相当の覚悟で憲法を改正し、それをもって「戦後の総決算」を進めようとしている空気はひしひしと感じられます。エネルギーも憲法と同じように「国家百年の計」である筈です。「断固として原子力を推進する決意」が国民の目にも耳にもはっきり認識できるような情報発信を、安倍総理殿、菅官房長官殿に心からお願いします。

平成28年7月25日